

# ら ぷ ら た 丸

《主要目》貨客船、大阪商船所属、7,267総トン、  
主機ディーゼル2基、  
出力7,000馬力、最高速力16.6ノット、旅客  
定員900人、1926年三菱長崎造船所建造

## 石川達三の出世作『蒼氓』の舞台と なった南米移民船



### 南米移民船が活躍したころ

南米の日系人たちが大勢、日本に出稼ぎに  
きているという。

日系移民の子孫である彼らは、最近、南米  
のほうの景気が思わしくないため、経済大国  
となったルーツ国日本へ逆に、出稼ぎにやつ  
てきているのである。彼らの父母、祖父母あ  
るいは曾父母たちがかつて、祖国から見捨て  
られたようなかたちで南米に新天地を求めた  
ことを思うと、まさに隔世の感がある。

日本人の南米移民は、明治に始まる。その  
数は、戦前が約二十三万人、戦後が約六万人。  
何といっても戦前が圧倒的に多い。

そして、その二十三万人のうち、八割の約  
十九万人は、ブラジルを目標して渡航したも  
のだった。したがって南米移民と言うと、ま  
ず頭に浮かぶのはブラジル移民であり、南米  
移民船史を語るばあいにも、ブラジル移民船史  
に大きなウエイトが置かれるわけだ。

明治以降の南米移民船史の主役は、大阪商  
船会社のブラジル移民船隊である。戦前、太  
阪商船フリートが輸送した移民数は約十四万  
人。これはさきほどの、南米移民総数二十三  
万人の六割にも相当する。

大阪商船が南米移民航路を開設したのは、  
大正初年のこと。大正の半ばには、北米航路



から転用した六千総トン型の「たこま丸」級貨客船六隻を投入。往航はアフリカ経由、復航はパナマ経由の世界一周航路とし、年間十航海のスケジュールを組んだ。

だが「たこま丸」級は船客定員が二百人足らず。貨客船とはいえ貨物主体の船であり、輸送効率が悪い。そこで大阪商船は昭和初年、とくにこの南米航路用に設計した七千二百総トン、船客定員九百人の移民船「さんとす丸」級三隻を三菱長崎造船所で建造した。

この三隻の就航で、ブラジルへの渡航者は急増した。急増の背景には、不況で日本国内に失業者が溢れていたこと、大正末年の排日移民法の成立でアメリカ移住が行き詰まったことなどがあつた。ブラジル移民に強い関心を持った日本政府は、渡航費の全額補助に踏み切り、その振興を図った。

この時期から日華事変のころまでが南米移民船の全盛期であり、その船内生活は、石川達三の出世作『蒼氓』（そうぼう）に余すところなく描かれている。

### 『蒼氓』に描かれた「らぶらた丸」

「一九三〇年三月八日。神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのやうに暗い」

戦前、第一回芥川賞受賞作品となつた『蒼

氓』は、こんな文章で始まっている。

『蒼氓』の舞台となつた船は、「さんとす丸」級の第二船「らぶらた丸」である。小説中の同船が神戸を出航したのは、一九三〇（昭和十）年三月十五日。九百人の移民を乗せて、四月三十日にサントスに着いた。

社会派作家といわれた石川達三が、戦前の日本の苦悩と悲劇を移民に託して語つたこの作品の第一部は、全国各地から集まつてきた農民たちが、神戸の国立移民収容所で八日間を過ごしたあと「らぶらた丸」で出航するまでの様子を描いている。次いでリオデジャネイロまでの四十五日間の洋上生活を綴つた『南海航路』、さらに南米に着いた移民たちが各地の入植農地へ散つていく『声なき民』と、三部作から構成されている。船好きが読んで面白いのは、一部と二部であろう。

『蒼氓』は言わば、昭和初期の日本人の苦闘記録である。同時にまた、いまでは姿を消してしまつた南米移民船の貴重な史料ともなつていのである。たとえば、移民船の旅客設備に付きものの「かいこだな」式の大部屋について、このように書いている。

「船に入つた移民達は手荷物を擔いでデッキを暫く迷つた後に、やっと降り口を見つけて與へられた室への階段を下りる。すると廣大な室の中にカーボン・ランプが五つ六つ點い

てゐて、室の周囲に添うて鳥籠のやうな鐵格子がびつしりと二段に幾列にもしつらへてゐる。是がベッドである。室は四つに分れてゐて、一室百八十人乃至二百二十人分である。室とは言ふが、メン・デッキの下の船艙で、上下左右は鐵板張りで、両舷の丸窓が五つづつ。室の中央はもう一段下にある船艙の艙口で、この艙口の蓋の上が移民達の食堂でもあり娛樂室でもあり喫煙室ともなる」

このように、「蒼氓」に描かれた「らぶらた丸」船内は、まことにリアルであり、ありきたりの取材ではとうてい書けそうにない。

実は石川達三は、『蒼氓』を書く数年前、この小説の題材となつた一九三〇年三月の航海に、特別三等船客の一人として「らぶらた丸」に乗つていたのである。

当時、經濟雜誌社の記者だつた石川達三は、社長の許しを得て南米への旅を計画し、旅先から雜誌に原稿を送る約束で「らぶらた丸」船上の人となつた。このとき雜誌に送稿した手記、『最近南米往來記』（中公文庫に収録）は作者の備忘録の意味を果たし、『蒼氓』執筆の際に大いに役に立つたという。

移民たちの夢を乗せて走つた「らぶらた丸」は、第二次大戦中、船名を「干珠丸」と改めて活躍したが、終戦の年の一月、サイゴン港内で空爆により撃沈された。 山田 迪生